

コロンタイ 革命を駆けぬける

コロンタイ 革命を駆けぬける 目次

序章 ポスト・コロントアイの新しい地平に向けて 9

第I部 コロントアイの生涯

第1章 生い立ち——革命家から世界初の女性外務大臣へ 18

チューリヒへの留学により、コロントアイは覚醒する 19

職業革命家への道 23

亡命時代 25

コロントアイ大臣になる 28

メキシコ駐在時のコロントアイ 34

第II部 著作から読み解くコロントアイの女性解放思想

第2章 母性論の集約『社会と母性』 44

『社会と母性』の構成とその思想 47

第3章 『母親労働者』——母性原理と死の哲学 54

『社会と母性』以前の母性論 54

『母親労働者』 55

第4章	「誰にとって戦争は必要か？」	80
	「誰にとって戦争は必要か？」	81
第5章	コロンタイの女性解放論	106
	『経済の発展における女性の状況』	106
	ベーベルの女性解放思想	120
	女性の権利と自由をめざす偉大な闘士——アウグスト・ベーベル追悼	122
第6章	『赤い恋』にみるコロンタイの女性解放思想	136
	『ヴァシリーサ・マルイギナ』	137
	ネップ批判の小説	148
第7章	コロンタイの自由恋愛論と超法規的性道徳論	154
	『三代の恋』——世間を驚愕させたコロンタイの恋愛観	154
	ラディカルな性道徳論「恋愛と新道徳」	161
第Ⅲ部	ロシア／ソヴェートにおける女性問題	
第8章	ロシア独特の女性解放運動	168

	自由をかち取るための闘いに身を投じたデカブリストの妻たち	168
	チエルヌイシエフスキーの女性解放思想	173
	女性ナロードニキ革命家	177
	ロシアのフェミニズム運動	181
第9章	新経済政策——ネツプと労働者反対派	186
	エレーナ・カボ『労働者の日常生活概要』	189
	労働者反対派とコロンタイ	195
第10章	革命後のソヴェート家族法	199
	「家族消滅論」——事実婚主義の登場	200
	事実婚主義の十年	205
	家族消滅論から家族強化論へ	217
	事実婚主義の終焉	219
第11章	女性解放の挫折とその後	223
	社会的労働における男女平等と家事労働	223
	今なお続く性別役割分業の実態	231

		終章	
		プーチンの少子化対策	234
		人口減少問題	236
		今後の人口予測と人口増加策の問題点	238
		「アンケートにみる女性の立ち位置と母体保護	243
		アレクサンドラ・コロンタイ「私の生涯と活動から」	251
注	謝辞	資料	
301	289		

序章 ポスト・コロントアイの新しい地平に向けて

ソヴェート政権期における女性のおかれた問題点は、ソヴェート憲法で保障されている形式的男女平等と実社会で認知されている状況との間の乖離をいかに埋めるかであった。社会主義革命の草創期にソヴェート政権にアレクサンドラ・コロントアイという才能ある女性が彗星の如く現れた。彼女自身の念頭には常に「女性は国家に対して男性と等しく働き、国家にまた新しい成員を与えろ」という二重の意味での義務が課せられている。それゆえ、国家も女性のその義務を女性が遂行できるように十分配慮すべきだ」というのが彼女の根本的持論があった。しかしこのマルクス主義に立脚した持論は現実生活では数々の葛藤と矛盾に悩まされた。コロントアイの数少ない文学的・自伝的作品とも言うべき『ヴァシリリーサ・マルイギナ』の中にも次のように出てくる。¹⁾

ヴァシリリーサは女性の経済的自立と政治的自由の獲得、女性労働者の母性の保護をめざして常に女性たちの味方であり、彼女等の利益を守る代弁者として日夜励む。彼女はかつて市会議員選挙の候補者を選ばれるなど工場の女性たちからも大きな支持を得ていた。彼女自身、子ども時代から工場で働いているので、いつでも彼らの言い分も分かるし、要求もよく分かったのである。しかしある時男の同志たちはこう非難したのである。

「女たちの問題は後回しにしたらどうか？　今は緊急なる問題が山ほどあるではないですか！」
ヴァン・シリーサはこの同志たちの意見にいきりたつて、くつてかかりながら言った。

『女たちの問題』が、どうしてほかの問題より小さいのですか？　みんながそんなふうを考えがちだから、『時代遅れの女』が生まれるのです。もし女性がいなかったら革命はできません。女こそすべてです。女がよくよく考えたりして、夫にぐずぐず言っているから男も人生を無益にすごすのです。『女を獲得することは、事を半ば成し遂げる』ことなのです」

とヴァン・シリーサは堂々と自己の見解をこのように述べている。

コロンタイは「新しい女性とは、第一に自立した労働単位であり、その人の労働が私的な家族経営への奉仕ではなく、社会に役だち、かつ必要とされる労働にむけられるのである」と定義づけているが、当時の現実との落差がいかに大きかったかは『ヴァン・シリーサ・マルイギナ』のなかの男女役割分担の葛藤を鋭く暴くことよって浮き彫りにしている。

ヴァン・シリーサの夫が党のなかで重要な地位を占めるようになり、妻であるヴァン・シリーサの肩に客の接待や主婦としての仕事がどつと押し寄せる。ヴァン・シリーサは家庭の外では家事の軽減のための共同の炊事場や食堂や託児所を建設してもらうために駆けずりまわりながら、家庭に戻ると、相変わらず昔から続いている古い夫と妻の役割分担を批判なく背負ってしまうのである。夫に「腹が減った。メシはまだか？」などといわしめているところに当時の革命のもつリアリティをうかがわせている。

この二人の夫婦の関係は革命後七〇有余年を過ぎた当時のソ連における男女のありようを検証する場合、きわめて示唆に富んだものになっている。かつて社会主義政権末期にペレストロイカやグラ

スノスチなどいくつかの変革のための波が押し寄せてきたにもかかわらず、女性独自の自立的な解放運動は残念ながら起きなかった。^③

従来ペーベルやエンゲルスは、女性の解放は社会制度の変革のあとで達成されると主張し、女性独自の解放のための闘いは単なる「ブルジョア的なもくろみ」^④にすぎないと論述し、このことはコロンタイももちろん肯定していた。しかし、権力が労働者の手にわたっても、女性と男性の意識変革と新しい制度や政策がきちんと遂行されなければ、いつまでたっても両性の真の解放は得られないのは自明の理なのである。

ペーベルは当時賢明にもこのことを洞察し得た稀有な存在であった。彼は『女性と社会主義』^⑤の中で注意を促している。女性の立場が、本来の階級の枠内でも同じ階級の枠内の男性と立場が同一でないこと、

「女性と労働者の立場の類似点は多くあるがある一つの点では女性は男性の先を行っている、つまり、女性は奴隷制度に置かれた最初の人間的生き物である。奴隷が存在する以前に女性は奴隷とされてしまった。このことから、自己の要求を階級的同志に注意を促し、党を女性の利益を指す闘争に参加させる、女性の社会的運動を引き出す特別な課題が生じる」と女性解放の本質を炯眼にも見抜いているのである。このような根本的観点がないと、例え男女平等のが日夜行われたとしても、たいいてい男性たちの闘争の主目的を第一の共通の課題としてそれに向き合い、女性にとって最も先行させるべき課題は後回しになってしまうことはその後の歴史が証明していることである。

コロンタイは家事の社会化などに対して十分な注意を払おうとしなかった同志たちに憤激しながら

も、ぎりぎりのところで社会民主労働党内に踏みとどまり、革命の女性解放に及ぼした積極的な意義を次のように擁護すらしている。概して産業革命や世界戦争の影響で、女性労働者の急速な増加は家族生活や、ブルジョア国家の女性たちの一般的な生活の様式としたりに未曾有の変化をもたらしたが、それにもまして、「十月革命が、然るべき重みのある言葉を発しなかつたならば、おそらくそれ以上に女性解放の過程は進まなかつたに違いない。十月革命は女性を新たに評価することに役立ち、社会的な有効な単位としての女性に対する見解を確固たるものとし、明らかにしたのである。……ところが、この現象をさげがたい歴史的事実として認めること、新しい女性のタイプの形成は新しい労働社会の形成をめざす全般的な進歩と関連していると理解することであるが、ブルジョアジーはそれをおこなうことができないし、やりたくないのである。十月革命がなかつたなら、自分で稼ぐ女性は一時的な現象であり、女性の場所は家族のなかにあり、生活の糧を得る夫の陰にあるという見解が今まで支配していたであろう⁽⁶⁾」と十月革命を高く評価しながらも、常に革命理論の後塵を拝む女性の解放を意識的に幾つかの著作でカバーしようとするのは何事だとヴァシリーサに怒鳴らしめている。時折しも臨時政権ケレンスキーから革命政権に移行しつつある時であり、ヴァシリーサすなわちコロナタのこの見解は当を得たものであると言える。この点に関しては、女性解放の大綱ではマルクスやエンゲルスの考えとは違うものの、男性のレーニンも種々に心を砕き、次のように述べている。

「社会主義社会の建設そのものは、われわれが、女性の完全な労働をかちとって、細々した人を愚鈍にする、非生産的な「家事」労働から解放された女性と一緒に新しい仕事にとりかかるときはじめ

てはしまるであろう」⁽⁷⁾

ソヴェート政権時代の社会主義建設の揺籃期の一九一七年一月四日、国家保護人民委員部が設立され、主として家族政策を扱うこととなった。すでにコロンタイは一九一七年一〇月二九日には人民委員すなわち今日で言う大臣に任命されていた。この時期コロンタイは墮胎の横行を防ぎ、母子を保護する目的で「母子宮殿」の設立を呼びかけ、家族政策の一環としてその設立に奮闘した。残念ながらコロンタイの国家保護人民委員としての期間は一九一八年の三月一九日までの短いものであったが、一九一七年一月一九日には、婚姻と離婚に関する婚姻制度を抜本的に変化させる法令ができた。すなわち、「市民婚、子および身分登録保護の家族に関する法令」が発表され、婚姻と離婚が教会を経ずにおこなわれる自由が保障され、また庶子と嫡子の同権や、墮胎の横行に対して出産は女性の社会的権利と義務であることが高らかに宣言されたのであった。そしてロシア史上初めて、「母子保護課」がコロンタイの手で設立されたのであった。わずか、数カ月間に輝かしい実績をコロンタイは造ったが、惜しくもその後海外に出奔することになった。その後、初期社会主義政権においての自由な婚姻形態は様々な曲折を経ながら、実質一九三六年まで続行された。しかし、スターリンの専制的政治により家族を国家の単位として生産と人口を増大させることの強化策により、女性は再び性別役割分業という頸木に繋がれる羽目になった。

現代ロシア人女性の延々と背負っている社会労働と家庭内労働という二重負担の構造を間接的に評して、「脱社会主義化の時代には、当該社会の持つ家父長制規範が露呈してくる」⁽⁸⁾と主張する論者も

あるが、要はソヴェート政権が崩壊したから家父長制規範が露呈されたのではなくて、ロシアでは革命以前から家父長制的な規範が延々と温存されてきたというのが偽らざる実情であろう。

さて現代におけるロシア人女性の状況はどうかと言えば、体制転換のひずみを一身に受けていると言っても過言ではない状況におかれている。もちろんかつてソ連時代にロシアの女性がおかれている立場を正直に語り、社会を批判することは反体制の烙印を押されることであり、タブーであった。その状況はサミズダート（地下出版）でのみ可能であった時代から見ると隔世の感がある。一部とは言え、才能のある女性たちは小規模ながら起業家としてどんどん活躍しており、評論、哲学・文学の領域では、ニーナ・サドウル（一九五〇）、ワレーリヤ・ナールビコワ（一九五八）、リュドミラ・ペトルーシェフスカヤ（一九三九）、オリガ・セダコワ（一九四九）などが注目の作品を世に送り出しており、さながら女性作家の時代といってもよからう。しかしこれらの人々はあくまで選ばれた女性たちであることに注意する必要があるであろう。一九九七年七月一〇日付の「独立新聞」^⑨によれば、ロシアにおける現代の女性は国民経済の半分を担い、平均的教育程度は男性を上回っているにも関わらず、

- (1) 失業率の割合が男性に比較してきわめて高いこと
- (2) 女性の平均賃金は男性の三分の二にしかならない（非公式では三分の一と言われている）
- (3) 女性は新しく進出してきた小規模のビジネスにはきわめて活動的であるが、大企業や大生産部

門においては決定権をもっていないこと

(4) 育児や家事の負担は依然として昔と変わらないこと

(5) 女性の数は選挙人のなかでは優勢で、選挙においては男性に比べてはるかに積極的であるにも関わらず、政権機構のなかでの女性の参加はきわめて少ない。

これらのことを列挙して、女性差別はますます増大するばかりであろうと予測し、現在女性がおかれている広範な諸状況はほとんど八〇年近くの間、独立した女性自身の運動が欠落してきたことに部分的には起因しているとし、女性の利益のための女性の代表部が国家機構に半ば統制されてきたと結論づけている。

新聞はさらに女性の利益を守り、民主主義的原理の継承のために第二回全ロシア女性大会の開催を報じている。言うまでもなく、第一回の大会は一九〇八年に開かれ、この大会で脱階級的な女性センターの設立が提案されたため、コロンタイとその同調者たちは自立した別グループを組織しようとした。しかしその目論見は頓挫した。一方、ロシア社会民主労働党の内部ではコロンタイとその同調者たちをフェミニストであると決めつけ、コロンタイが女性の問題に比重をおきすぎると告発したのもいた。その後九〇年余りの時を経て、体制転換の怒濤に流されながら現在のカオスの中で、今や女性の意識も大きな変換を迫られていることは事実であろう。本書では、世界で初めて社会主義政権を樹立し、貧富の差をなくし、輝かしい男女同権を約束したソヴェート政権の初期にあつて、コロンタイが如何なる論理によって母性と子どもの権利を守り、輝かしい初期ソヴェート政権の特性である男

女平等を唱道したか、またその後如何なる事情によつてその実績が歪曲されていったかを具体的事例による事実婚から登録婚への推移に触れることにより明らかにしていきたい。

† 著者

杉山 秀子 (すぎやま・ひでこ)

1943 年生まれ。早稲田大学大学院露文学修士。モスクワ大学留学後、駒澤大学にて露語、露文学を 36 年間教授。現同大学名誉教授。

著書に『ゴークー文学の世界』(ユック舎)、『もう一つの革命 アレクサンドラ コロンタイ くその事業』(学陽書房)、『コロンタイと日本』(新樹社) その他。

コロンタイ 革命を駆けぬける

2018 年 1 月 20 日 初版第 1 刷印刷

2018 年 1 月 30 日 初版第 1 刷発行

著 者 杉山 秀子

発行者 森下 紀夫

発行所 論創社

東京都千代田区神田神保町 2-23 北井ビル

tel. 03 (3264) 5254 fax. 03 (3264) 5232

web. <http://www.ronso.co.jp/>

振替口座 00160-1-155266

組版／フレックスアート

印刷・製本／中央精版印刷

ISBN978-4-8460-1663-0 ©2018 Printed in Japan